

“帝国愛国心” 対 “領土愛国心”
—7年戦争以降のドイツにおける民族意識の高まり— (2)

(著者: PD Dr. Wolfgang Burgdorf)

„Reichsnationalismus“ gegen „Territorialnationalismus“
Phasen der Intensivierung des nationalen Bewußtseins in
Deutschland seit dem Siebenjährigen Krieg

(Autor: PD Dr. Wolfgang Burgdorf)

訳者: 鎌野多美子*

(Übersetzerin: Prof. Tamiko Kamano)

Ⅲ

20年後に、皇帝側のジャーナリズムは、新たにモーザーの構想を取り上げた。その動機は、1785年にフリードリヒ2世によって設立されたドイツ諸侯同盟を巡る公開諸議論だった。7年戦争と、それに続いて生じたドイツ人の民族精神を巡る議論の後、諸侯同盟の設立によって引き起された公開議論は、ドイツ人の最後のチャンス、つまりフランス革命より以前にドイツ民族とドイツ民族の体制について熟考するチャンスだった。諸侯同盟ジャーナリズムの枠内で、内容的には20年前に生じた民族精神の議論を受継いだ自由議論が生まれた。新たに、ドイツ人の自由の定義を巡って、また誰が自由の受益者であるかという問題を巡っての議論がされた¹⁰³。諸侯同盟のジャーナリストたちが、ドイツのバランスの確保とドイツ諸侯の自由の確保の論拠によって、ヨゼフ2世の意図していたオーストリアとバイエルンの合併に反対したのに対して、皇帝宮廷は王家の王権政治の目的と帝国政治の目的を新たに同時に行うことに力を注いだ。これは、皇帝的な考えをもっていたジャーナリズムのもとで非常に多く繰返された表現、つまり意図的にすり替えられた“ドイツ体制の集中”という表現の中に映し出されている¹⁰⁴。

宮廷の激しい公式議論、外交文書のやりとりを引き続いて、宮廷ジャーナリストたちの闘いが始まった。それは著名な脚本家オットー・ハインリヒ・フォン・ゲミンゲンによって開始された¹⁰⁵。彼は自分の才能をオーストリア国家官房長カウニツの仕事に生かしたことで有名である¹⁰⁶。話の内容が祖国の自由についてだったので、発言の意思表示を申し出なければならなかった¹⁰⁷。ゲミンゲンは、自由ドイツ人だと名乗った。マインツ選帝侯に雇用され、またプロイセン国家官房長ヘルツベルクによって組織化された同盟のジャーナリズムにも雇用されていた歴史家ヨハネス・フォン・ミュラーは、『二重の自由 *Zweierlei Freiheit*』¹⁰⁸という表題のついたゲミンゲンのセンセーショナルな論文に反応した、そして自由というテーマをさまざまに扱う技法を、ゲミンゲンの新出版物においても幅広く容認

*かまの たみこ: 大阪国際大学現代社会学部教授 (2011.12.9受理)

した¹⁰⁹。皇帝派弁護士クリストフ・ルートヴィヒ・プファイファーは、そのパンフレットの中で「ドイツ民衆の自由、ドイツ帝国の自由、そしてドイツ諸侯同盟とは何か？」¹¹⁰を取り上げた。またそれに続いた何れのパンフレットも、ドイツ人の自由（の本質）を論究することを避けなかった。

これらのパンフレットは、ドイツにおける自由の議論を重要な局面において考察することを可能にしている。民族精神の議論よりいっそう力強く、諸侯同盟は自由の議論を速めた。議論の推進力は以下のことをもたらした。つまり“ドイツ人の自由”の概念は、もはや帝国諸侯の自由としてではなく、個人の自由として理解され、抽象的な政治理論の“抽象的政治学の”領域から、帝国における具体的体制の有様に関連づけられた¹¹¹。プファイファーの論は、ヴィーンでは諸侯同盟に対抗する“民衆の自由”というスローガンでもってドイツ人一般大衆を動員しようとしたことを示している。これは、皇帝だけが少数派である帝国等族の自由を保護することができるという立論が伝統的だったのに対して、諸侯同盟時代の皇帝ジャーナリズムに新たな質を付与した。19世紀初めのヨハン・ゴットリーブ・フィヒテ（1762-1814）やフリードリヒ・シュライアーマッハー（1768-1834）のように、プファイファーは民族という概念を“合法的支配機関による弾圧、征服、横暴に反対するスローガン”として利用した¹¹²。

宗派的な対決—これは1760年代には浮上していた—は、帝国政治レベルでは広範囲に亘って克服されていた。しかしプロイセンの正統派は繰返し帝国の連合的国家の特色、つまり表向きのドイツのバランスを強調したので、その議論は脱宗派的な、1760年代の民族精神の議論の思想によって強化された、7年戦争中のペンによる攻防戦の繰返しのような印象を与えた。

古い“プロシアの”歴史解釈に逆らって、この点では、民族精神の議論でのように、市民の自由を保証する民族的統一国家の理念¹¹³は、政治的に目覚めた市民階級からの要求だけでなく、オーストリア皇帝王家によっても宣伝され、ドイツ市民階級の意識へ通じる道を見つけた。

総じて以下のこと、つまり現存する帝国の発展に関する理念の大半は、皇帝ジャーナリズムによって宣伝された、一方で同盟ないしプロイセンの傾向のあったジャーナリズムは、現存する状況の維持に固執するか、或いは、帝国の統一に関して、破壊的な考えを主張するかの何れかであったことが分かる。帝国発展の民族的な見通しに関しては、諸侯同盟パンフレットの筆者たちは、より不利な立場にあった。すなわち、バランスの論拠に基づいて、かれらは現存しているものを維持することしか民族的関心事として宣伝することができなかった。ヨハネス・フォン・ミュラーは、ドイツのバランスの保持と、それによってヨーロッパのバランスの保持を、ヨーロッパ或いは人類へのドイツ民族の仕事と同一視することによって、あまり魅力的でないこの見通しをイデオロギー的にさらに高めようとした¹¹⁴。

ミュラーの構想では、ドイツ人の自由はしかしながら諸侯によってのみ擁護されることができた。諸侯同盟への最後の著書の末尾で、“期待”を—同盟に裏切られ—皇帝ヨゼフ2世に向けるまでは、ミュラーの構想は、ドイツ民族の、“ヨーロッパおよび人類上の責務

履行のために” 反皇帝—小ドイツの帝国を目的としていた¹¹⁵。中世以来一般的だったように、諸侯同盟時代に諸侯の身分上の自由でもって、皇帝諸特権への反証が挙げられた。なぜなら諸侯が努力して手に入れた領土支配権の拡大は、同時に帝国における彼ら貴族階級の諸権利の発生である¹¹⁶。

それに対抗して1785年以降新たに、皇帝側のジャーナリズムは既に1760年代に実施された皇帝による帝国改革、民族にとって理想的な政治の領域としての帝国改革を宣伝した¹¹⁷。この帝国改革は、新たに帝国住民の活気ある民族感情によって守られ、同時に帝国を帝国市民と帝国農民にとってよりいっそう魅力的にさせるというものだった。皇帝の代弁者たちは臣下たちの自由の要求を強調し、皇帝を彼らの保証人として描写した。皇帝派の煽動は、啓蒙主義の衣の中で、帝国と皇帝に、貴族でない住民の新しい、民族的な、そして解放を目指した独自性を生み出すことのできる、新しい時流にかなった権限を手に入れさせようとした¹¹⁸。

皇帝は中世以降被った地位喪失を帝国制度の枠内で補ったのにひきかえ、ウィーン宮廷によって18世紀後半に宣伝された構想の中では、帝国諸侯は不必要なまでに邪魔な存在として現れていた。特に皇帝による自由保証の考えは、諸侯同盟政党の均衡論拠を意味なきものにさせるのに適していた。このジャーナリズムの名目上の目的は、“改革” という概念の昔の意味での、一時権力のあった中世の帝国の復元ではなく、なにかしら質的に新しいものだった。

IV

ドイツ民族設立のプロセスが如何に迅速だったかは、フリードリヒ2世が1780年に自身の著書『アレマン人の文学 *De la littérature allemande*』の中で、ドイツ文学の発展を、美学的、内容的にフランス文学を基準にするよう義務化しようとしたことに表れている¹¹⁹。この関連で、1783年にベルリン科学アカデミーが提出した問いは“何がフランス語を国際言語にしたのか、なぜフランス語は優位に値するのか。フランスが優位を維持していると思っていのか”である。

最後に、ここでは、ドイツ語の演劇力、文学力、そして科学力のことを述べる。バロックの時代に、アンドレアス・ギリフィスのような詩人、クリスチアン・トマジウスやクリスチアン・ヴォルフのような学者とドイツ語言語協会は、ドイツ語が有利になるために、この議論を取り入れることを決定した。バロック時代のラテン言語文化とロココ時代のフランスの政治的および文化的な優位による強い反対の気運はあったものの、フリードリヒ2世の思惑は、メーザーやヴィーラントやハーマン（1730–88）の強力な反論、またドイツ語の価値と広範囲に及ぶ有用性について一致した見解を述べ、部分的にフリードリヒ2世によって評価されたフランス語の価値をまさに疑問視し始めた他の人物たちの強力な反論に直面して不成功に終わったのである。

プロイセン王フリードリヒ2世は、この“文化闘争”^{Kulturkampf}においては、自分の意思を貫徹することはできなかった。フランス文化は18世紀末のドイツにおいては、ますます貴族と宮廷の文化として理解されたので、(フランス語優位を主張する)フリードリヒ2世に対抗す

るドイツ語擁護と、後の“ロマンス語”に反対する闘争は、明らかに市民階級の特徴を手に入れた。民族思想(民族という考え方)が市民階級の“イデオロギー上の構築”へと固まったのに応じて、民族国家を実現化する考えも、次第にその輪郭がはっきりしてきた¹²⁰。プロイセンが、フリードリヒ2世のあからさまなフランスびいきと一時的な帝国敵視政策が原因で、民族の期待の星になることが難しかったとすれば、伝統的な皇帝権力にも民族上の意味構築のための相応しい手段と方法が欠けていた。

さしあたり、カール5世やフェルディナント2世の時代に由来する伝統的な諸留保が用いられた。それらは“ハープスブルク優位”と称する常等文句でもって要約されている。プロイセンの考え方をもったジャーナリストたちは、1755年以降さらに、オーストリアがドイツの覇権として現れた時はいつもオーストリアの適性を疑った。その理由は、オーストリアはドイツ人の“宿敵”であるフランスと結びついていたからである。“宿敵”という概念はすでにフランツ1世やルイ14世の時代以来伝承されていた。これは信じるには値しない、なぜなら、プロイセンはバイエルンと並んで1755年まで帝国においてフランスの伝統的な同盟国だったからである。それに加えて、ベルリンは、宮廷と、数多くのユグノー派人数のために、フランス語とフランス文化によって特徴づけられていたからである。1783年になってはじめて“ベルリン週刊誌”は、いまやドイツ語は都市においては優位性を獲得したと断言した¹²¹。それゆえ、両者には、その民族思想を、彼らの政治の意味を構築しつつある要素としてうまく自分のものにするのは難しかった。両者の競争は、結果としてぬきこんで王家は民族への忠誠を申し出ないということを伴った。

しかし、自分たちの文学と言語を非常に熱心にフリードリヒ2世に対抗して守った市民階級の学識者たちもまた、民族を独力では成立できなかった。これは確かに神聖ローマ帝国の領土的な断片化、つまりベルリンとウィーンの王家が民族の指導権を握ることを妨げた領土上の断片化の結果でもあった。宗派的な分割もまた、-宗派的分割が帝国の政治において諸侯同盟設立以降ほとんど意味を持っていなかったといっても-市民階級の民族意識の形成を妨げた。プロテスタントの領域内で成功した言語集合体、つまりタキトゥス継受、ルター崇拜、宗教改革崇拜、同様に“フリッツ的な考え方”の意識集合体は、カトリックである帝国においてはさしあたり共鳴版を見つけられなかった。ドイツ人の民族劇場についての努力は、それとは逆に、宗教上の境界線を壊せなかった。この点で大事なのは、君主と貴族によってではなくて、市民階級と市民階級特有の価値によって特徴づけられる定義、舞台を用いて宣伝されるべき民族意識の定義である。レッシングの『ハンプルク演劇論』の中には“祖国の愛”について書かれている。“悪戯をし、必要もないのに、市民全ての義務を軽蔑して、死の中に身を投じる狂気じみた者が殉教者のタイトルを不当に行使できるには、健康な理性の声が大きく鳴り響いている時代の中で”、われわれは生きている、と書かれている¹²²。レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム *Minna von Barnhelm*』(1766)は確かにプロイセン国家を代表する名誉の原則との批判的論争として作成されていたが、ゲーテは『詩と真実 *Dichtung und Wahrheit*』の中で、その作品を“7年戦争の真の産物、非の打ち所のない北ドイツ人の民族気質から生まれた真の産物として”思い出している、そしてゲーテのその考えは後に受け入れられた¹²³。レッシングおよびレッ

シングと共に戦っている人間は、さしあたり市民の民族劇場の構想をもっては、^{Publikum} 観衆から反響を呼ばなかった。観衆は民族教育という考え方にそっては、教育されるつもりは無かった。観衆は市民階級的な価値を求めず、相変わらず元首の行動と国家の行動、道化師作品と下品な猥談を求めた。最初の市民階級のハンブルク^{Nationaltheater}民族劇場はプログラムをまもなくこの意味において変えなければならなかった。特徴的なことだが、最初の常設の民族劇場は、市民階級ではなく、諸侯によって創設された¹²⁴。同様に、民族的な出発を伝えることのできた作品は見当たらなかった。仰々しい論文形式だった帝国ジャーナリズムは、幅広い層の心をつなぐには相応しくなかった。モーザーやゲミンゲンあるいはプファイファーのような帝国愛国心的な声明書は、帝国への民族的同意だけでなく拒否反応をも生じさせた。

しかしオーストリアとプロイセンは民族の^{Sinnstiftung}意味構築の難しさを、革命諸戦争の初めにと、ナポレオン時代の終りに、民族を一つにまとめてフランスに対抗した時に、克服できた。北ドイツのプロテスタントの文化領域内で発展した狂信的、愛国主義者の動機は、この時代に至るまで、帝国愛国心には未知の世界だった。帝国愛国心は啓蒙主義の道徳の教えの意味において愛国的だった。たとえば広範囲にわたる戦争ジャーナリズムに表われている民族としての出発ムード¹²⁵は、(諸)民族は戦争中に作り上げられた¹²⁶というディーター・ランゲウィーシュ(1943-)の理論を肯定する印象的な証拠である。全民族の出発という、普及した感情はしかし、ますます不利になっていった戦争の経過によって苦しみ、そしてプロイセンが1795年に帝国北東部を制度に反して中立に導き、皇帝と南西ドイツの領土を運命に委ねた時に姿を消した。それでも帝国制度の無名批評家はなおも1796年に、ドイツ人男子は“帝国制度のためにのみ、ドイツ愛国者である”ことができると確信していた¹²⁷。

ライン同盟愛国心は、恐らく第三番目のドイツのアイデンティティー、三つ組みの、すなわち本来のかつての帝国のアイデンティティーを固めることができていたかもしれない¹²⁸。しかし、その愛国心は、総ドイツ人の民族的な動きにはならなかった、なぜならライン同盟は二つのドイツの覇権を締め出し、それ以上に“宿敵”フランスと密接に結びついていたからである。オーストリアのジャーナリズムは、フランスを常に際立たせることを怠らなかった。

オーストリアとプロイセンが、^{Nation}民族をナポレオン・フランスに対峙する解放戦争に導いた時に初めて、総ドイツ人の意識の新たな高揚という事態になった。この時代の、極端に偏狭愛国心的なプロイセンのジャーナリズムは—その代表者はエルスト・モリッツ・アルント(1769-1860)だけが挙げられる—部分的には^{Kompensationshandlung}補正行為として理解される。1795年以降の不名誉と感じられるプロイセンの行動は、記憶から抹消されるべきである。解放諸戦争の公式な煽動もまた、新たにランゲヴィースの命題を証明するであろう。目立ったことは、シュタイン男爵が解放戦争中にプロイセンの半公式報道キャンペーンに先立って導入した諸協議の、皇帝宮廷で1766年に民族精神煽動の関連において導入されていた協議との一致である。カウニッツは当時皇帝ヨゼフ2世に対して、作家はいつの時代にも、“民族の精神と思考方法”に大きな影響をもっていたと述べた。証拠資料として、彼は17および18世紀の反皇帝大ジャーナリストたちの成功を挙げた、たとえば学術的な学校を創設した

モンツァンパノ、ヒッポリトゥス・ア・ラピデ、トマジウス（1655-1728）、そしてルーデヴィヒをもち出した。一方で多くのカトリックの大学で帝国法は教授されなかった。とりわけ“^{Meinungen}考え方”に関して言えば、権力でなく、信条のみがいくらか成果をあげることができるので、“一般的に広まり、深く根付いた邪説を次から次へ”同じ方法で根絶するより以外に方法は無かった、つまりジャーナリズムの助けでもって、邪説がかつて誕生したように¹²⁹。

シュタインは、1806年10月14日のイエーナとアウエルシュタットでの壊滅的な敗北後、プロイセン復興はナポレオンに対抗する総ドイツ人の高揚の中でのみ実現されうるといふ見解だった。とりわけ彼は総ドイツ人の民族意識の欠如をつきとめなければならなかった。フリードリヒ二世一色のプロイセン及び1795年以降の中立的プロイセンが生じたことは、プロイセンにとって命取りになったように思われる。プロイセンを助けるために、シュタインは早くも1806年にケーニックスベルクでアルント、ケルナー、アルニム（1781-1831）、そしてクライスト（1777-1811）のような作家たちを自分の周りに集めた。なぜなら、シュタインは、作家たちだけがこのような状況下で、それまで不十分にしか発展しなかった、全ドイツ人の祖国のイメージを宣伝し、多くの層に根付かせることができるという確信をもっていたからである。“文筆稼業は、他の民族へよりも、より以上に多く、ドイツ人の愛読心が理由で、また公立教育施設が影響する多くの人間が理由で、ドイツ人に影響を及ぼした”¹³⁰。

それは以下のことをもたらした。つまりもともと帝國的、民族的な総国家という思想に向けられていた好戦的な立論の原型は、対ナポレオン戦争中に、すっかり総ドイツ人の愛国心の部分になった。そのためには、カトリックの皇帝とプロテスタントの帝国等族の間の二重主義、あるいは寧ろオーストリアとプロイセンの間の二重主義がこの状況の中で新たに持ち上がってきていたというのが前提条件にある。

V

総合して以下のことがわかる。18世紀後半に、さしあたり民衆の民族的な自己発見として出現したジャーナリズムは、本質部分においては、競合するドイツ諸役所の演出だった¹³¹。スイスの手本は、競合する諸役所に勤務し、勤務先の役所の政治を合法化しようとした或いはするべきだったジャーナリストたちによってドイツで取り上げられた。先ずは少人数の教育エリートのみで競争しながら民族アイデンティティーの構想が如何に展開されたかが、おそくとも解放戦争の宣伝活動で融合し、広範囲に亘って大影響を及ぼした民族アイデンティティーの構想が如何に展開されたかが見て取れる。

したがって一共同体、一民族は、そのようなものとしてイメージされうること¹³²、共同体自体に先ずは提示されなければならなかった。18世紀後半当時の関心ある人びとは、それを意識していた。このことを、皇帝の、自らの重要参謀との集中協議は、民族精神議論の始まりに提示している。それはそうとして、アプトもこれを明確に公式化している。“魂がよほど変り種でなければ、各魂にはっきり烙印されうる特定の^{gewisse Stempel}特徴”は存在すると彼は書いている。“魂は、それによって複製が輝く（ために必要とする）研磨をまさに必要と

していない。この特徴を身につけている者が一度に1万2,000人いるとすれば、彼が特定の特徴を要求しないことに、誰かそんなに罵倒するだろうか？”¹³³ ゲーテは1811年に、7年戦争はドイツ文学に最も大きな影響をもたらしたと回顧的に解説している。一ナポレオン誕生のためには、民衆と民衆の家畜が“一人の男の力になる”というような出来事が必要だったということが明らかになった。フリードリヒ2世の英雄化によって、プロイセン人とプロテスタントのドイツは、相手側には欠けていた、また“その後の努力によっても相手側にはそれを補完できなかった自分たちの文学という宝を手に入れた。王のプロイセン人作家たちは重要な概念の作成に先ずは従事した、そしてフリードリヒ2世が断固それらについて知ろうともせず、自分の名前ですべてをした時、彼らはより熱心に概念作成に従事した”¹³⁴。1788年にはヨハン・ヴィルヘルム・フォン・アルヒェンホルツ (1741-1812) は、“^{der außerordentliche Krieg} 異例な戦争”中にドイツで生じた“^{Geistesrevolution} 精神革命”を同じくプロイセン王のドイツ文学に対する無理解を指摘していた¹³⁵。モーザーは早くも戦争直後に、“プロイセンの新世代のジャーナリストたちはプロイセン軍の作戦行動や古射手の技術に勝るとも劣らず他の全てに上回っている”と断言した¹³⁶。

民族精神の議論と諸侯同盟の議論のジャーナリズムは、世論の構造変化を極めて早い段階で観察することと、ドイツの政治的な公的意見がどのようにして誕生したかを追求することを可能にした。ジャーナリズムは政府と役所への反論の中で生み出されたのではなく、政府と役所機関と一緒に、自分たちの政治を第一義的に他の政府や役所機関を相手に、次に住民を相手に正当であると宣言するために、ジャーナリズムを生み出した。ドイツ帝国の公的政治的見解は、第一に行政上の思想の伝達、つまり帝国の体制と、皇帝および帝国等族の政治に異議を唱える、政府から独立したジャーナリズムが加わっている行政上の思想伝達だった。公開拡大のこのプロセスは、役所の公式議論から脱して、自分の政治を支援することと、競合する役所の政治を認めないことが臣民にアピールされることによって支持された。敵方諸政党はこの目的のためにそのつど愛国心の代弁者として現れ、ドイツ人の愛国心に訴えた。帝国における先ずは政治的思想伝達の行政上の性格は、個別の役所の秘密主義を妨害し、点数稼ぎを無意味なものにした。革命以前のドイツにおいては愛国心的心情と政治上の反対は、“同じようなもの”では決してなかった¹³⁷。

そのような行政上の思想の伝達、しかしまたドイツ人学者のそれと結びついた討論、つまり自身の^{Nation}民族 (の本質) と、昔の帝国への自らの^{Nation}民族 (の本質) についての討論が、“無教養の住民”の大多数にとって、また彼らの民族意識にとって、何の意味があったのかは、勿論それは突き止めにくい。しかし少なくとも民族精神の討論への一参加者は、学者だけでなく、民衆もまたその討論に関心をもっていることに驚きを述べている¹³⁸。ニコラウスの見積もりによれば、1770年にはドイツ人民族思想に関心をもっていた人は2万人もいた¹³⁹。それはもちろん、異なった考え方の幅広い多様性と理解できる。討論の過程において、同一視 (アイデンティティー) のモデルを巡る基本的な葛藤が現れた。たとえば、帝国は、或いは帝国の諸領土は、たとえばプロイセンは、住民たちが^{Nation}民族として構成されることで、税金徴収範囲であるべきかという葛藤ができた。1749年に自作のヘルマン劇の中で民族創設神話の一つを扱ったメーザーにとってはたとえば、民族的な統一は、連邦

制の形態でのみ努力して得る値打ちのあるものだった。諸侯同盟時代の皇帝ジャーナリストたちは、それとは反対にユニテリアンだった。とはいえ7年戦争以降の「Reich und Nation帝国と民族」というテーマでの討論の集中は、帝国と民族は、少なくともドイツ人学者たちのアイデンティティーにとって新たに重要になっていたことを裏付けている。

VI

最初に引用したゲーテの文章はこの論文とどのような関係にあるのか。よく引用されるゲーテのその文章は、帝国終焉に対するゲーテの評価については、全歴史家世代の資料の扱い以上の事は言い表していない。その引用文は、全体の脈絡から引き裂かれてはいるが、それは同時に二つの偏見、つまり、帝国の非重要性和ゲーテの非政治的性格を証明しているように思えるという理由で¹⁴⁰、一般大衆に普及している有名な文である。

ゲーテがそんなに非政治的でもなかったことは、ゲーテとゲーテの同行者が既に数日前にライン同盟の設立を集中審議していた¹⁴¹という事実が示している。そして劇的なヨーロッパ政治の出来事はその古典主義者（ゲーテ）と旅行団の関心を引いた¹⁴²。なおそれから後の1819年に、ゲーテの『西東詩集 *West-östliche Diavn*』のはじめに、“北と西と南は分裂し、諸玉座は弾け、諸王国は揺れている”と書かれている。『ファウスト *Faust*』もまた、ファウストを政治的歴史的に解釈するなら、古い帝国への壮大な哀歌として解釈することはできる。『詩と真実』の中では、ドイツ人の消滅したローマ帝国への愛の告白が、何度も述べられている。それだけに、帝国終焉の重大ニュースが彼のもとに届いた時、なぜゲーテは、召使の行動に対して激怒しているその名高い文章を、世間にありがちなこととして書いたのか、という疑問が生じる。帝国終焉についての、従業人たちについての、御者についての、そしてゲーテの旅行団についてのその文章は、どう説明がつかののだろうか。

ゲーテはその文章を書いた翌日1806年8月8日に、イエーナの諸侯警察署に手紙を書き、従業人ゲンスラーの逮捕を願い出た。ゲーテがその場にいるにもかかわらず、ゲンスラーがゲーテの家族と同居人に対して“極めて粗野で、反抗的で、怒りっぽく、無礼な態度をとった”と書かれていた。ゲーテのいつもどおりのやり方と善意が、雇用人がそれまで解雇されてなかったという結果をもたらしていた間は、ゲーテの“威嚇的な叱責”は、過去においては“一時的な効果”しかなかった。さてしかしながらカールスバートへの旅行の間中、雇用人の気分はどこまでも手に負えなかった。旅行同伴者に対して“卑劣”な態度を取っただけでなく、－それについてはヘンドリヒ少佐がより詳細なことを手続きの際に書き記している－それどころか旅行の帰りにも、ありとあらゆる悪意に満ちた行為を御者につけた、それは“最終的に御者台での二人の激しい口論になり、全ての客が阻止したにもかかわらず、最終的に殴りあいになった。私の知っている限りでは、ゲンスラーは仲裁を断り、全ての叱責と注意を無視して、イエーナまで狂気に満ちたやり方で低級な態度を取り続けた。”それは大きな旅行馬車の御者台で殴りあいになり、それによって全乗客の命が危険に晒された。にもかかわらず、そのごたごたは更に続いた。ゲーテは、“私はその事件で、済ませてきた湯治の効力が怒りと腹立ちによって全て失せたのが分かったので、また見苦しい、許し難い自力救済を強いられるという局面に立たされたので、それゆえこ

の若者をイエーナ到着時に軍事的な拘留に届けさせるより以外に方法はなかった”と報告している¹⁴³。

考えてみよ、枢密顧問官であり、閣下であるゲーテが、彼の召使たちとの殴り合いの中で、彼の家族と一緒に旅行していた知人たちの目前での殴り合いの中で、なんというセンセーショナルなことか！広い大きな世界において千年間も存在していた帝国が歴史の中に埋没していく一方で、ゲーテの旅行団の小さな世界では、そんなセンセーショナルなことが、実際の革命が起こっている。主人はその反抗的な召使いをもはや制御することはできなかった。口頭および身体的な責めはもはや役に立たない。等族社会の自己規制は機能不全になった。そして軍隊が介入しなければならなかった。元来本当とは思えないその有名な文章に表れていることはゲーテの敗北である。しかしその文章は歴史家世代に気に入られた。

帝国最後の50年間の帝国意識と民族意識について判断する時はいつも、ゲーテの有名なその文章は、帝国意識や民族意識の欠如を裏付するには役立たない。1806年より以前の時代の“帝国と民族”というテーマでの集中議論は、もっと正確に言うと、以下のことに辿り着いた。つまりドイツ民族統一への憧憬は1815年以降新しい帝国への憧憬として現れた。

(Endnotes)

¹⁰³ Zur etymologischen Abteilung des Begriffs „Freiheit“ s. Jürgen Schlumbohm, *Freiheitsbegriff und Emanzipationsprozeß. Zur Geschichte eines politischen Wortes*, Göttingen 1973, S. 7.

¹⁰⁴ Moralisch-politische Betrachtungen über Assoziation und Ländertausch, Freiburg 1787, S. 4. Wilhelm Ludwig Wekhrlin, *Aussichten ins Ansprachische*, in: *Paragrafen* 2, 1791, S. 153-156, S. 155. Ähnlich: Ders., *Ueber Bayerns Tausch. Mein Kontingent zur Tagesmaterie*, in: *Das Graue Ungeheuer* 5, 1785, S. 220-227, S. 222. Von der Notwendigkeit eines zu versammelnden landständischen Kongresses in Oberschwaben und dessen nützlichen Folgen, Straßburg 1798, S. 5. Selbst Johannes von Müller verschloß sich dieser Einsicht nicht, er hoffte jedoch, daß die territoriale Konzentration der durch das Aussterben fürstlicher Häuser erfolgen werde, Ders., *Darstellung des Fürstenbundes*, Leipzig 1787. [Abdruck d. 2. verb. Aufl. 1788]; Ders., *Sämtliche Werke*, hg. von Johann Georg Müller, Tle. 1-27, Tübingen 1810-1819, T. 9, 1811, S. 13-310, S. 288. Unabhängig von Bayern äußerte sich später auch Wieland in diesem Sinne, ders., *Ueber deutschen Patriotismus. Betrachtungen, Fragen und Zweifel*, in: *Der Neue teutsche Merkur*, Mai 1793, S. 3-21, zuletzt abgedruckt in: Ders., *Meine Antworten. Aufsätze über die Französische Revolution 1789-1793*, hg. v. Fritz Martini, Marbach 1983, S. 123-131, S. 127. Johann Friedrich von Pfeiffer war von diesem Gedanken völlig durchdrungen.

¹⁰⁵ Reichsfreiherr Otto Heinrich von Gemmingen, *Ueber die Königlich Preussische Assoziation zur Erhaltung des Reichssystems*, Deutschland Juli 1785.

¹⁰⁶ Zu Gemmingen (1755-1836) NDB 6, S. 179f., ADB8, S. 557f., DBA378, 295-304 sowie Pillen, *Publizistik*, S. 44-46 mit borussischer Tendenz.

¹⁰⁷ Gemmingen, *Assoziation* (wie Anm. 105), S. 4.

¹⁰⁸ Müller, *Sämtliche Werke* (wie Anm. 104), T. 9, S. 3-10, ursprünglich mit Juli 1786 im „Deutschen Museum“ veröffentlicht.

¹⁰⁹ Die Vorrede und das erste Buch seiner „Darstellung des Fürstenbundes“ war dem Thema Freiheit gewidmet. Leipzig 1787. [Abdruck. 2. verb. Aufl. 1788], in: Ders., *SW*, T. 9, 1811, S. 13-

- 310.
- ¹¹⁰ Christoph Ludwig Pfeiffer, Was ist teutsche Volksfreiheit? Teilweise identisch mit der auch selbständig erschienenen Schrift: was ist der deutsche Fürstenbund? [Speyer] 1786. 1789 erschien anonym: Betrachtungen über die Freiheit und Wohlfahrt des deutschen Reichs, und über die Mittel zu deren Erhaltung von einem Patrioten, [Ulm] 1789.
- ¹¹¹ Johann Heinrich von Justi, der u. a. in seiner Abhandlung über „Natur und Wesen der Staaten“ die bislang fortschrittlichsten Positionen zur bürgerlichen Freiheit in Deutschland formuliert hatte, bezeichnete sein Werk ebenso wie ein späterer Herausgeber, wahrscheinlich um sich gegenüber den Zensurbehörden zu salvieren, als „politische Metaphysik“, ders., Natur und Wesen der Staaten als die Quelle aller Regierungswissenschaften und Gesetze, mit Anmerkungen hg. v. Heinrich Godfried Scheidemantel, Mitau 1771 [1. Aufl. 1759, ND Aalen 1969], S. X u. XXIV. Karl von Rotteck tradierte diese Methode der Rechts- und Staatsbetrachtung, als er die Staatslehre in drei Gebiete einteilte: theoretischer Teil (Metapolitik), praktischer Teil (Politik im engeren Sinne), historischer Teil (Staatenkunde), ders., Lehrbuch des Vernunftrechts, Bd. 2, Stuttgart 1829, S. 9f. [2. Aufl. ebd. 1840, ND Aalen 1964]. Eberhard Schmidt-Assmann, Der Verfassungsbegriff in der deutschen Staatslehre der Aufklärung und des Historismus, Berlin 1967, S. 106. Manfred Riedel, Aristoteles-Tradition am Ausgang des 18. Jahrhunderts. Zur ersten deutschen Übersetzung der „Politik“ durch Johann Georg Schlosser, in: Alteuropa und die moderne Gesellschaft. FS für Otto Brunner, Göttingen 1963, S. 78-317, ND in: Ders., Metaphysik und Metapolitik. Studien zu Aristoteles und zur politischen Sprache der neuzeitlichen Philosophie, Frankfurt/M. 1975, S. 129-168. Zur bisherigen Erforschung des Freiheitsgedankens in Deutschland des 18. Jahrhunderts s. Schlumbohm, Freiheitsbegriff (wie Anm. 103), vgl. Rez. v. Peter Wende, in: ZHF 3, 1976, S. 245f. Jürgen Schlumbohm, Freiheit. Die Anfänge der bürgerlichen Emanzipationsbewegung in Deutschland im Spiegel ihres Leitwortes, Düsseldorf 1975. Wolfgang Zorn, Reichs- und Freiheitsgedanken in der Publizistik des ausgehenden 18. Jahrhunderts (1763-1792), in: Paul Wentzcke (Hg.), Darstellungen und Quellen zur Geschichte der deutschen Einheitsbewegung im 19. und 20. Jahrhundert, Bd. 2, Heidelberg 1959, S. 11-66.
- ¹¹² Angermeiser, Nationales Denken (wie Anm. 3), S. 179.
- ¹¹³ Ludwig Pfeiffer, Was ist der deutsche Fürstenbund? [Speyer] 1786. Ders., Volksfreiheit (wie Anm. 110) und weitere Schriften Pfeiffers. Burgdorf, Reichskonstitution (wie Anm. 70), S. 266-351.
- ¹¹⁴ Es sei Aufgabe der Publizistik, den Deutschen „vom Fürsten bis zum Bauern“ gewahr werden zu lassen, daß seine Aufgabe darin bestehe, „Retter der Menschheit gegen wiederkehrenden Despotismus“ zu sein, ders. Darstellung, S. 107. Zorn, Reichs- und Freiheitsgedanken (wie Anm. 111), S. 53. Müllers Auffassung von der europäischen Funktion des Reiches stimmte mit jener überein, die Rousseau in 1761 im „Extrait du Projet de Paix perpetuelle“ geäußert hatte. Paul Stauffer, Die Idee des europäischen Gleichgewichts im politischen Denken Johannes von Müllers, Basel 1960, S. 40.
- ¹¹⁵ Zorn, Reichs- und Freiheitsgedanken (wie Anm. 111), S. 54.
- ¹¹⁶ Tadeusz Cegielski, Das Alte Reich und die erste Teilung Polens 1768-1774, Stuttgart 1988, S. 15.
- ¹¹⁷ Wenn Reinhold Koser zu einem entgegengesetzten Resümee gelangt, so beruht dies auf einer selektiven und verzerrten Wahrnehmung der Quellen, vgl. ders., Brandenburg-Preußen in dem Kampf zwischen Imperialismus und reichsständischer Libertät, in: HZ 96, 1906, S. 193-242, S. 240.
- ¹¹⁸ Hansjakob Stehles Auffassung, daß „erst als die ideellen Grundlagen des alten Reichsgedankens der Aufklärung zum Opfer gefallen waren, ein deutsches Nationalbewußtsein entstehen

konnte“, scheint sich zu bestätigen. Hinzu kam jedoch die Verschärfung der Verfassungskrise des Reiches. Ders., *Der Reichsgedanke in dem politischen Weltbild von Leibnitz*, Diss. Frankfurt/M. 1950, S. 59.

¹¹⁹ Der vollständige Titel: *De la literature allemande; des defauts qu'on peut reprocher; quelles en sont les causes; par quels moyens on peut les corriger*. Am besten zugänglich in Friedrich der Grosse, *De la literature allemande*, Französisch-Deutsch, mit der Mörserschen Gegenschrift, kritische Ausg., hg. v. Christoph Gutknecht/Peter Kremer, Hamburg 1969. Wienfreid Woesler, *Die Idee der deutschen Nationalliteratur in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts*, in: Klaus Garber (Hg.), *Nation und Literatur im Europa der Frühen Neuzeit*, Tübingen 1989, S. 716-733, S. 716-733.

¹²⁰ Ebd., S. 722.

¹²¹ Ebd., S. 721.

¹²² Gotthold Ephraim Lessing, *Hamburgische Dramaturgie* [zuerst in 2 Bden. 1767/69], hg. v. Klaus L. Berghahn, Stuttgart 1990, S. 130.

¹²³ 2. T., 7. Buch.

¹²⁴ Roger Bauer/Jürgen Wertheimer (Hg.), *Das Ende des Stehgreifspiels-Die Geburt des Nationaltheaters. Ein Wendepunkt der Geschichte des europäischen Dramas*, München 1983. Willfried Baner/Albert M. Reh (Hg.), *Nation und Gelehrtenrepublik. Lessing im europäischen Zusammenhang*, München 1984. Ute Daniel, *Hoftheater. Zur Geschichte des Theaters und der Höfe im 18. und 19. Jahrhundert*, Stuttgart 1995.

¹²⁵ Conrad Alois Bauer, *Erörterung der Archiv-Ansprüche des teutschen Reichs auf die Bestandtheil des ehemaligen Königreichs Burgund und Arelat, zum Behuf einer Grenzberichtigung zwischen Teutschland und Frankreich, o. O. 1793. Reichskriegs Operations- und Friedensplan wider Frankreich. Gedanken und Wünsche eines deutschen Patrioten an Rheinstrome, Worms im Monat Oktober 1792, nach dem Einfall der Neufranken in die hiesige Gegend 1792. Was ist das deutsche Reich zu thun schuldig? Und wozu ist es noch weiter berechtigt? In Absicht auf die Beschwerden deutscher Unmittelbarer und Mittelbarer gegen Frankreich, als auf die französische Staatsreligion überhaupt; nach dem deutschen Staats- und allgemeinen Völkerrecht von einem deutsch-patriotischen Rheinländer, o. O. 1791. 1795 hieß es dann, „wir wollten Paris in einen Steinhäufen verwandeln, und fürchten nun selbst für unsere Hauptstädte.“ *Gedanken und Vorschläge über den Frieden*, in *Briefen von einem Patrioten*, o. O. 1795, S. 6.*

¹²⁶ Dieter Langewiesche, *Mit Gewalt zum Glück. Die Zusammengehörigkeit von Nation und Krieg in der europäischen Geschichte*, in: *Frankfurt Allgemeine Zeitung*, 1. Februar 1997, S. Bilder und Zeiten.

¹²⁷ Kritik... (wie Anm. 69), S. 73. Der Kritiker forderte allerdings gleichzeitig die Parlametarisierung der Gesetzgebung.

¹²⁸ Schuck, *Rheinbundpatriotismus* (wie Anm. 96).

¹²⁹ Kaunitz, *Beantwortung*, in: *Khevenhüller-Metsch, Tagebuch* (wie Anm. 92), S. 502-518, S. 515. Auch Colloredo wies auf die Bedeutung der Universitäten hin, ebd., S. 493.

¹³⁰ Karl Freiherr vom Stein, *Briefe und amtliche Schriften*, hg. v. Erich Botzenhardt u. Walter Hubatsch, Bd. 3, Stuttgart 1961, S. 818. Susanne Moßmann, *Das Fremde ausscheiden. Antisemitismus und Nationalbewußtsein bei Ludwig Achim von Arnim und in der „Christlich-deutschen Tischgesellschaft“*, in: *Herrmann, Machtphantasie* (wie Anm. 3), S. 123-159, S. 127.

¹³¹ Es ist nicht zwangsläufig, daß „ein Bedürfnis nach Information und Diskussion“ am „Beginn jeder Politisierung“ steht. Am Beginn kann auch Agitation stehen, ihre Erfolgsaussichten sind jedoch um so größer, wenn sie auf eine entsprechende Disposition trifft. Insofern möchte ich Danks Ausführungen ergänzen, vgl. ders., *Herder* (wie Anm. 3), S. 330.

- ¹³² Benedict Anderson, Die Erfindung der Nation. Zur Karriere eines erfolgreichen Konzepts, erweiterte Neuaufl. Frankfurt/M. 1996, S. 15.
- ¹³³ Abbt, Vom Tode (wie Anm. 19), S. 612f.
- ¹³⁴ Goethe im siebten Buch von „Dichtung und Wahrheit“, hier zit. nach: Kunisch, Einleitung, in: Ders., Aufklärung (wie Anm. 19), S. 737-751, S. 742.
- ¹³⁵ Johann Wilhelm von Archenholz, Geschichte des Siebenjährigen Krieges in Deutschland von 1756 bis 1763, Frankfurt 1793 [1. Aufl. 1788], hier in der Edition von Kunisch Aufklärung (wie Anm. 19), S. 9-515, S. 399-403, 497f.
- ¹³⁶ [Moser,] Was ist: gut Kayserlich (wie Anm. 78), S. 194.
- ¹³⁷ Vgl. Werner Krauss, Zur Konstellation der deutschen Aufklärung, in: Ders. (Hg., Perspektiven und Probleme, Neuwied 1965, S. 143-265, S. 171 und Christoph Prignitz, Vaterlandsliebe und Freiheit. Deutscher Patriotismus von 1750 bis 1850, Wiesbaden 1981, S. 36.
- ¹³⁸ [Eberhard,] Gedanken (wie Anm. 29), S. 14.
- ¹³⁹ Woesler, Idee (wie Anm. 119), S. 718.
- ¹⁴⁰ Hierauf hat bereits Georg Schmidt hingewiesen, ders., Goethe: Politisches Denken und regional orientierte Praxis im Alten Reich, in: Goethe-Jahrbuch, 1966, S. 197-212, S. 211.
- ¹⁴¹ „Nachricht von der Erklärung des Rheinischen Bundes und dem Protektorat. Reflexionen und Diskussionen“ steht im Tagebuch Goethes. Goethe, Sämtliche Werke (wie Anm. 1), II. Abt., Bd. 6 (33), Tagebuch, 6. 8. 1806, S. 75.
- ¹⁴² „Unterwegs politisiert und neue Titel Napoleons ersonnen“ steht im Tagebuch vom 8. August. Goethes Reise begleitet Friedrich Wilhelm Riemer, der einst die Kinder Wilhelm von Humboldts erzogen hatte und nun seit 1803 Hofmeister von Goethes Sohn August war, schreibt später dazu: „Es war am 8. August 1806 unterwegs von Pöbneck nach Kahla zu, wo Goethe und ich neue Titel für Napoleon ersannen. Wo wir den Spaß von subjektiven Prinzen machten und Fichtes Lehre in Napoleons Taten und Verfahren wiederfanden. Goethe hat es auch in seinem Tagebuch angemerkt. Wir Napoleon, Gott im Rücken, Mohamet der Welt, Kaiser von Frankreich, Protektor von Deutschland, Setzer und Schätzer des empirischen Rechts“, ebd., S. 76.
- ¹⁴³ Ebd., S. 7 6-78.